

孟津抄 三十一冊

平井仁子

本書「孟津抄」三十一冊は、「黒川文庫」の中の一つとして本学図書館に襲蔵せられているものである。現在、『孟津抄』の伝本研究は漠とした概観しか知られていない状態であり、そういう状況の中での本書の占める位置が定かでないというにとどまらず、黒川本『孟津抄』としての紹介すら未だなされていない。しかし本調査の結果としては、本書は『孟津抄』の伝本中かなり貴重な一本と思われる。

一 『孟津抄』の伝本

『孟津抄』の伝本研究として独立した論は、現在のところ野村精一氏の『孟津抄』の形成——本文、史論への序章——（源氏物語古注集成6『孟津抄』下巻）一篇のみかと思われる。この論以前では、新潮社『日本文学大辞典』と『源氏物語事典』の「注釈書解題」とに、簡単な諸本解説がある程度にすぎない。これらの中、『日本文学大辞典』の解説によれば、

現存する諸本は大別して二種となし得るかと思はれる。第一は草稿本の系統で、第二は清書本の系統である。とある。その、第一類草稿本とは九條家旧蔵、種通自筆本（桃園文庫蔵、天理図書館蔵）を示し、第二類清書本とは、書陵部本二部、内閣文庫本、神宮文庫本、東大本などを示す。

また、野村氏の前記論文に依れば、究極のところは、

諸本の現状をみれば、これを対象化する方法として、たとえば本文系統論といった既成のそれは、ほとんど無効に等し

いといえよう。(五一七頁)

ということであり、

ほとんどそれらは関係性を明示しないままに、相互に孤立しているかに見える。(全上)

となるわけだが、しかし、いちおうの区分けとして、次のように認めておられる。

古本——九条家旧藏本、桂宮本、陽明文庫本、書陵部藏中臣祐範筆本など

流布本——内閣文庫本、岩国徴古館本など

増補本——秋山虔氏藏本(多くの書き入れを持つ江戸後期の写本で、本行部分は流布本とほとんど同一)など

草稿本と清書本との二大別においては本書は当然後者に属するわけだが、野村氏のいわれる古本、流布本、増補本においては、本書はいずれに位置するのにか。以下検討するところによって、本書と書陵部藏中臣祐範筆本との緊密な関係が明白になるので、或る程度の見通しは可能になる。以下本書の紹介を含めて、検討を始めてみる。

二 本書の書誌

本書は、本学図書館の黒川文庫所蔵の写本であり、源氏物語五十四帖全巻にわたっての註釈である。縦二六・六樞、横一九・八樞、袋綴、楮と思われる料紙を用い、表紙は紙表紙で青地である。全巻通して本文開始第一丁オに、長方形の「黒川真頼藏書」・「黒川真通藏書」とある二種の藏書朱印が捺されている。

表紙の右上部には、「物語」という文字を朱の丸で囲んだ朱印が捺してあり、これは全巻に共通する。第一冊目にはこの朱印の下に「桐壺」とあり、また「共卅一冊」と同じく朱で記されている。外題は第一冊目に限って

津
孟信抄 九條種通公著

とあり、「信」の字を朱筆の斜線で抹消し、右傍に「津」と訂正している。第二冊目以降は全て「孟信抄二」等の形式であることからして、この第一冊目の外題の抹消はどのような意味があるのかを考えさせるものである。内題はないので、本書の

書名を知るには、この二種（第一冊目と、第二冊目以降の全巻）の外題しかないわけである。

現在のところ「孟津抄」と記すのが一般的な表記となっているが、他の諸本ではどうなのかここでみておきたい。孟津抄本文の唯一の活字化である「源氏物語古注集成6」の『孟津抄』（野村精一編）の底本である国立公文書館蔵内閣文庫本は、その解説によれば「孟津」とある由である。管見の範囲においては、この「孟津抄」という表記の伝本は岩国徴古館本にあるのみで、内閣文庫本（太政官文庫本）、神宮文庫本、書陵部本二部はすべて「孟津（抄）」である。但し、陽明文庫本には「孟津集」とあり、これも他に例を見ない唯一の異様な名称である。今後『孟信抄』なる題号を有する写本に邂逅した時点で何らかの解答が得られるかもしれないが、現段階では、第一冊表紙は本書の校訂者が「孟信抄」という表記の誤ちに気付いて朱筆で訂正したもので、第二冊目以後の各冊は訂正しなかったものであろうかと考えておく以外にない。

冊数は三十一冊で、の中に源氏物語五十四巻の註釈を収めており、その内訳は次のとおりになる。

	外 題	所収巻名
①	孟 ^津 信抄 <small>九條種通公著</small>	桐壺
②	孟信抄 二	箒木
③	孟信抄 三之四	空蟬・夕顔
④	孟信抄 五之六	若紫・末摘花
⑤	孟信抄 七之八	紅葉賀・花宴
⑥	孟信抄 九	葵
⑦	孟信抄 十之十一	賢木・花散里
⑧	孟信抄 十二之十三	須磨・明石
⑨	孟信抄 十四之六	濡標 盡・蓬生・閑屋
⑩	孟信抄 十七之八	繪合・松風
⑪	孟信抄 十九之廿	薄雲・槿
⑫	孟信抄 二十一	乙女

⑬	孟信抄	二十二	玉鬘
⑭	孟信抄	二十三之四	初音並・胡蝶豎並
⑮	孟信抄	廿五之七	螢豎並・常夏・篝火並
⑯	孟信抄	廿八之九	野分・行幸
⑰	孟信抄	卅之卅一	蘭・椀柱
⑱	孟信抄	三十二之三	梅枝・藤裏葉
⑲	孟信抄	卅四	若菜上
⑳	孟信抄	卅五	若菜下
㉑	孟信抄	卅六之八	柏木・横笛・鈴虫
㉒	孟信抄	卅九之四十	夕霧・御法
㉓	孟信抄	四十一之二	幻・匂宮
㉔	孟信抄	四十三之四	紅梅・竹河
㉕	孟信抄	四十五之六	橋姫・椎本
㉖	孟信抄	四十七之八	角総・早蕨
㉗	孟信抄	四十九	寄生
㉘	孟信抄	五十	東屋
㉙	孟信抄	五十一	浮船
㉚	孟信抄	五十二	蜻蛉
㉛	孟信抄	五十三之四終	手習・夢浮橋

この三十一冊という編成の「孟津抄」は、管見の範囲でいえば、本書一本のみである。流布本とみられる内閣文庫本等の漢文跋によると「孟津抄二十卷」とあるのみで、その他の現存諸本には巻数表記はなく、内閣文庫本と岩国徴古館本とは五十四冊、神宮文庫本は十五冊、陽明文庫本は二十一冊、書陵部蔵本二部は各二十冊、東大本は十冊で、冊数は一定してはいないものと思われる。

本文は全巻通して一面十行の本で、総紙数二九九四枚、書入、貼紙の類はなく、虫損はあるものの判読には殆ど支障はない。

以上が本書の書誌的解説であるが、もう一つ最も重要と思われるのは奥書である。元来、『孟津抄』における序・跋・奥書の類としては、九条家旧蔵自筆本には序文があり、また流布本と見做される内閣文庫本、神宮文庫本、岩国徴古館本には漢文の跋があるのが普通である。しかし、本書にはこれらの序跋どちらもなく、その点では、書陵部蔵中臣祐範筆本、陽明文庫本等古本系諸本と一致する。序跋の問題に関しては、前掲の野村氏の論文（五三〇頁以下）にも説かれ、新潮社『日本文学大辞典』の池田亀鑑氏の解説には書陵部蔵中臣祐範筆本について、

この本は、原本を忠実に転写したものであるにかかはらず、巻頭の自叙と巻尾の自跋がない。或は清書本にはこれ等がなかったのかもしれない。

とある。この序と跋とは本書には存在しないので、それについて論ずることは本稿では省略するが、本書にはこの序跋に代わるものともいえるべき奥書が四箇所にみられる。次の如くである。

(1) 第三冊末——夕顔卷末

此抄九條禅閣御聞書也以御自筆書写之校合早

御本從桐壺至夕顔帙数百十七丁為一冊被閉之者也

右之紙数者百十九丁也

1592
天正廿_五辰十二月二日

(2) 第九冊末——関屋卷末

此御抄先年より依御許可令書

写之処去正月に禅閣^{九条殿}八十三にして

奠し給ひぬなき跡までの事依被仰

置御息所殿下^{兼孝公}へ治部少輔祐

繁致懇望申出物也

文禄三年壬午 卯月十二日書写之

祐範

(3)第三十一冊——手習卷末

九條禪閣御聞書之抄也以御

自筆書写之早

件御本美濃昏半切十六行ニ

被遊昏数五十三丁也

天正廿年壬辰 十月十日

(4)第三十一冊末——夢浮橋卷末

此源氏物語抄ハ九條禪閣御聞書也

逍遙院殿實隆 称名院殿公條 御両所

数年御心をつくされ尋問給と云々

今日字治卷のふん書写功早
文禄二年癸巳 九月廿一日 中臣祐範

これらの奥書は、書陵部藏中臣祐範筆本にあるものと全く同一であり、且つこの二本にしか存在しない。

ここで奥書ではないが、本書柏木卷末にある「**顯密定語**」の問題に言及しておきたい。「**顯密定語**」とは、次の如きものである。

顯密定語

近衛をみかさ山兵衛を柏木なと諸哥枕に「かきつけたるも堤中納言宰相中将より中」納言になりて賭弓のかへりある
しの日故郷のみかさ「の山は遠けれとよみ土御門中納言兵衛佐な」る時をはかした木のもりにし物をとよみたるよ
り」さきに此御笠山柏木万葉にも古今にも「近衛兵衛の本文愚眼ハ見をよひ侍らねと」やかてこれらよりおもひつけ

てをのく申事にや」とそ

この「顕密定語」については、野村精一氏が「孟津抄校訂遺事(三)——顕密定語をめぐって——」(研究と資料第十三輯、昭六〇・七)に引用して、その後には次のようにいう。

これがここ若菜下巻末尾におかれるゆえは、ほとんど理解しがたい。それも当然であって、これはむしろ柏木巻頭にあるべき内容と考えられる。(中略)しかしながら、孟津抄諸本にして、ここに右の「顕密定語」を置く本文は、未だ管見に入らない。但し、ここに特色を示すのは、書陵部蔵中臣祐範書写本であって、これでは、(中略)柏木巻末に付されている。

とある。本書においてもまた書陵部本と同じく柏木巻末に存在する。四箇所の奥書と同様、この「顕密定語」のおかれて位置から言っても、本書と書陵部蔵中臣祐範筆本とは他の諸本とは異なる性格を共通にもっていることを見うるのである。

三 本書の性格

以上が本書の書誌であるが、本項では、五十四巻中一卷——若菜上巻——を採り上げて、具体的に本書の特徴を捉えることを試みたい。何故この巻を取り上げるのかと言え、本書と書陵部蔵中臣祐範筆本の近似する関係が判明したが、本書の若菜上巻は完本であるが、書陵部本の若菜上巻は中断して後半が欠脱していることをはじめとして、いくつかの興味深い問題が介在しているからである。

流布本系と見做される内閣文庫本(ここでは太政官文庫本を用いる)(略号内)と神宮文庫本(略号神)と、古本系としての書陵部蔵中臣祐範筆本(略号書)と、本書(略号奥)との四本間の本文を比較検討した結果を以下述べる。因に、若菜上巻に限って言えば、国立公文書館所蔵本二種——内閣文庫本『孟津』(和学講談所旧蔵本)と太政官文庫本『孟津抄』——の本文は殆ど同一であり、岩国徴古館本、陽明文庫本の本文も同じである。比較してみても特に問題になるところはない。『孟津抄』若菜上巻の本文において、最大の問題となる点は次のことであろう。即ち、前述したように、奥と書とは、同

じように四箇所に奥書を有し、また「顕密定語」なる註の所在場所も共通するという形態的類同性をもっている二本であるにもかかわらず、この若菜上巻後半部が、㊦には、他の諸本と同様に存在するが、㊧にはこれが欠脱していることである。その㊨の中断箇所を掲げておく（数字は㊦の若菜上巻での丁数・行数である。以下同じ）。

をき物のみつしひき物ふき物など（73オ・4）

という註積項目のみで註積はなく、甚だ唐突な形でふつつりきれている。㊦の若菜上巻は、138ウまでであるから、ほぼ中央の部分での突然の擱筆である。管見に入った諸本の若菜上巻はすべて完本で、右の如く中断されているのは㊧のみである。

それでは、共通して残っている㊦と㊧との若菜上巻の中断以前の部分においてはどうかというかと、註積項目の立て方は全く同一であり、各註積項目の見出し語としての文章も、一〜二字程度の異同が数箇所存在するだけでその他は同じである。

とすると、若菜上巻の中断以前の部分の㊦と㊧とは非常に近い関係にあると想定しうる。次に㊦と㊦との関係を調査する。

因に、㊦と㊦とは若菜上巻全体の中十箇所程度の小さな異同があるのみであるから、殆ど同一の本文とみられる。概観すると、㊦㊦はいづれにも中断、欠損部分はなく、若菜上巻全体にわたって註が加えられている。ここでは一字一句のこまかい異同は問題にせず、項目——註積項目の文章と、その項目の註積内容の文章とにおける、これら諸本間の異同に絞り、そこにどのような特徴があるのかを見たいと思う。

まず第一に註積項目の異同、といってもその中を

㊦項目自体の有無——項目を立てるか立てないかの異同と、一項目としての範囲の大小による異同

㊦註積項目の文章（見出し語としての源氏物語本文）の長短による異同

という二類に分けることが考えられる。これらの分布状況を次に表示した（㊦若菜上巻の総丁数一三八丁を二〇丁ずつ七分割し、その各々の部分部分における異同数を示す）。

〔第一表〕

① 一〜二〇——2 (㊦2、㊦0)

②	二一〇	四〇	1	(A 1、B 0)
③	四一〇	六〇	1	(A 0、B 1)
④	六一〇	八〇	27	(A 13、B 14)
⑤	八一〇	一〇〇	58	(A 28、B 30)
⑥	一〇一〇	一二〇	64	(A 28、B 36)
⑦	一二一〇	一三八	62	(A 29、B 33)

この表でまず分ることは、項目に関しては前半部①〜③60丁までは殆ど問題にするほどの異同は、④⑤いづれについてもない。これに反して、後半部④〜⑦、即ち61丁以降は④⑤共に異同が急に増加しているという歴然たる事実がある。この分岐点をもっとこまかく言えば、75丁才あたりからであるから、④六一〜八〇丁をこの75丁才で前後に二分すると、前半一、後半二六となる。またこの分岐点は㊦が欄筆した73丁才とほぼ一致することも認めうる。

項目異同の分布数は右のようであるが、次にその内訳をみる。④に分類される註釈項目の有無(立項してあるかどうか)の点については、

(1)㊦が立てている項目で㊦㊦に項目として立てられていないものが28例ある。例えば、
みすほうのたんひまなくぬりて 護摩ゴマの壇ダン也(78オ・8〜9)

(2)㊦に立てていない項目で㊦㊦に項目として立てているものが52例ある。例えば、㊦の77ウ・3〜4間に入るべきものとして次の如きがある。

きりつほの御かたちかつき給ぬるにより正月ついたちよりみすほうふれんけさせ給 明石女御御産ちかつく御祈禱也
(㊦)

その他、㊦㊦にあって㊦にないもの、㊦㊦になくて㊦にあるもの、㊦㊦にあって㊦にないもの、が各一例ずつあるのみである。これらの数字から総合して判断すると、項目数は㊦より㊦㊦が多い。

次に、同じく④のもう一つのこと、註釈項目の範囲の大小による異同としては、

(1)㊦の一項目が㊦㊦では二項目に分けられている場合が四例ある。例えば、

・いにしへより人のそめをきけん藤の衣にも何かやつれ給へきわか身にへんくゑの物とおほしなして(92オ・6〜8)
という(㉞)の項目が、(㉜)では

・ふちころもにもなにかやつれ給へき(㉜)

・わか身はへんくゑの物とおほしなして(㉜)

という二項目に分けて立ててある如きである。

(2) (1)とは逆で、(㉞)で二項目に分けて立ててある項目目が(㉜)では一項目にまとめて立ててある場合が一〇例ある。例え
ば、

・このふみかき給ひて(93ウ・9)

・たえたるみねになん(93ウ・10)

という(㉞)の二項目が、(㉜)では

・この御ふみかき給て三日といふにかのたえたる峯に(㉜)

という一項目にまとめられている如きである。一項目の含む本文の範囲の違いから項目数に違いを生じているものである。

その他、(㉞)の三項目を(㉜)で二項目に、また、その逆の例が各一例ずつある。全体数が少ないため、どれほどの問題になるまいが、(㉞)の二項目を(㉜)では一項目にまとめた形の方が多いことに注目すべきであろう。

㉞に分類した項目の文章(見出し語)の長短による異同としては、

(1) (㉞)より(㉜)の方が長く引用しているものが三九例ある。例えば、

所をかへて(78オ・2) ↓をんみやうしともゝ所をかへてつゝしみ給へく申ければ(㉜)

(2) (㉞)の方が(㉜)より長く引用しているものが八例ある。例えば、

あやしくひか／＼しくすゝろにたかき心さしありと(109オ・4〜5) ↓あやしくひか／＼しく(㉜)

その他、特に右(1)(2)の如き傾向があるわけではないが、異同のあるもの五六例で、(㉞)より(㉜)の方が、源氏物語の本文を長く引用する傾向が認められる。

次に、各項目の註釈項目の文章（見出し語）の異同をみる。まずその異同数が、若菜上巻を第一表同様に七分割した時の分布状況を表示する。

〔第二表〕

①	一	二〇	21
②	二	四〇	27
③	四	六〇	10
④	六	八〇	54
⑤	八	一〇〇	62
⑥	一〇	一二〇	62
⑦	一二	一三八	74

前半部（①～③）における異同数は、殆ど零に等しかった註釈項目数の異同の場合ほどではないが、非常に少い。然るに、後半部④以降、つまり書の中断箇所以後の部分で急に大きくなっていることは明らかである。しかし、④六一～八〇丁間の五四例を書の中断箇所で区切ると、中断箇所以前が二八例、中断箇所以後が二六例と、殆ど同数で、この点は註釈項目の場合の一对二六と大きく異なっている。だが、ひとつの特徴として前半二八例はすべて註釈のみの異同であるのに反し、後半二六例は註釈項目共に全体の異同という形が多くなっていることが挙げられる。

次にその註釈そのものをよくみると、

(1) 奥の註釈より内神の註釈の方が詳しい場合が一四一例ある。たとえば、奥では、「御馬ともむかへとりて右のつかさともこまの樂^{ガク}してのゝしる」という本文に、

弄間御馬をむかへとるは祿^{ロク}にたまはるにや右のつかさ高麗^{コマ}の樂^{ガク}してとは右の樂人の事か一勘むかへとるとは内よりひかれたる御馬をうけとる事也（76オ・10～76ウ・5）

と註を加えて終っている。内神では、この後に、

夕霧右大将なれば右馬寮の御監也 取要書之

という註釈を加えてある。これは④、⑤の註の頭に「河」とあるように『河海抄』の註釈の末尾の一行である。この例のように他の註釈書の説を引用し付加したものが七五例、つまり全体の約半数にのぼる。

(2)⑥の註釈より⑦の註釈の方が詳しい場合が六〇例ある。たとえば、⑦には、「たいのうへなどのさることし給はぬは」の註に、

むらさぎの上の御産サなとし給はぬはさうくしく口惜けれども但心つかひをし給はぬは心やすきとの源の心也(77ウ・7510)

とあるが、⑥では単に、

産のきつかひなとをば紫は知給はぬと也(⑥)

と簡単な註があるにすぎない、というような事例である。

他この(1)(2)どちらに属せしめるわけにもゆかないが、異同⑦の註釈と⑥の語釈とが違っているもの一〇三例ほどがある。

そこでも、⑦より⑥の方が註釈説明においては詳細であるという傾向は認められる。また他の註釈書——「河海抄」「花鳥余情」「弄花抄」など——からの引用が、⑥に多く⑦には少ないことも一つの特徴である。

以上、⑦と流布本系の⑥との関係を調査した結果をまとめると、(1)註釈項目や見出し語においても、またその註釈においても、若菜上巻の後半部、換言すると⑦の中断箇所付近から急激に異同数が目立って多くなり、(2)しかもその異同のある項目の註釈は、⑦の註釈よりも⑥の註釈の方が詳細である。というのは、⑦の註釈には、「河海抄」「花鳥余情」「弄花抄」等の註釈を付け加えた形が⑥となつていて多いということを意味する。であるから、若菜上巻に限って言えば、⑦は、流布本と見做されている⑥とは異なる性格を有すると言っておくことができるであろう。

そこで再び⑦と⑥との関係にもどってみると、⑦の註釈の中に「孟津抄云々……」の字句が数例存在することである。次にそれらを拾い出してみると、次の如くである。

①をき物のつくゑふたつからの地の からの羅といふ本あり猶花ニくはし 孟津抄ニアリ(65ウ・657)

②うしろの御屏風四てうは式部卿宮なんせさせ給へるいみしくつくしてれのしきの多なれと 紫の父宮也古今云内侍

のかみ右大将藤原朝臣の四十賀しける時に四季のゑかけるうしろの屏風にかきたる哥略之孟津抄ニアリ(66オ・3〜7)

③ひつしの時はかりにかく人まいる 延喜六十十日御賀先奏万歳楽積合香次皇麿猶孟津抄ニ注(66ウ・4〜6)

④世の中のわつらひならむ 行幸は国民の煩なればとて思召とまらせ給也尤殊勝也猶孟津ニアリ(68オ・8〜9)

⑤しはすの廿日あまりの程に中宮まかてさせ給て 其礼孟津抄ニ注(68オ・10〜68ウ・1)

⑥名たかきおひ 高名録云 韓狩落花形等也 孟津抄ニアリ(70オ・5〜6)

⑦むかし物かたりにも物えさせたる 紫式部か詞也 孝經史記ノ語注孟津抄……(70オ・9〜10)

この「孟津抄ニアリ」とはどういうことなのか、この発言を含んでいる本書は「孟津抄」ではないということの意味するか。書誌の項で前述した如く、外題には「孟津(信)抄」とあるが、思えば四つの奥書のいずれにも「此抄」「此御抄」「九條禅閣御聞書之抄」「此源氏物語抄」とあるのみで、「孟津抄」という書名は見えない。とすると、この外題は疑わしいのであろうか。しかしこの疑問に対して答える資料は、現段階では全く発見しえない。但しこの「孟津抄」にありという辞句があるのは、本書の六五丁〜七〇丁で、その部分は、例の㊦の中断箇所直前に相当する部分であり、また㊦にもこれと同じく「孟津抄ニアリ」という辞句が存在する。前掲の野村氏の論文『孟津抄』の形成——本文史論への序章——には、これらの事実を紹介した上で、

この書写者中臣祐範には、本書が「孟津抄」である、という自覚はなかつたものか。いや、それに気付いて、かれはここで筆をかきさしたのではないか

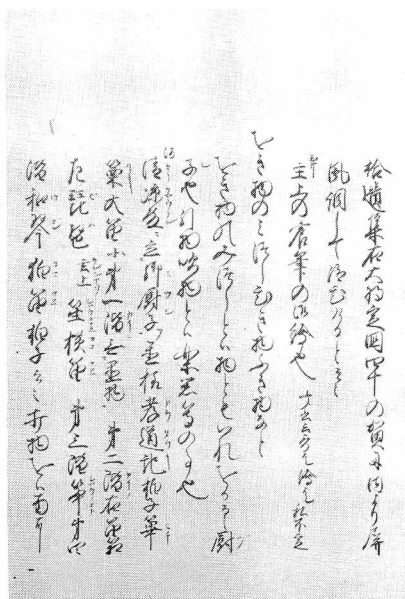
とあるのも一つの解釈であろうが、断定はしえない。

以上検討してきたところによると、本学所蔵の黒川文庫本『孟津抄』は、書陵部所蔵の中臣祐範奥書本『孟津抄』と同じ系統の伝本で、註釈項目の立て方や註釈の文章は全く同じである。だが、書陵部本が中断している部分以後に相当する黒川文庫本の註釈項目及びその註釈の文章は、書陵部本の脱落部を補うものと考えていいものかどうかは、明らかにしたい。というのは、もし、黒川文庫本が書陵部本と同一系統の写本を書写し、書陵部本は後半の書写を中断し、黒川文庫本は中断することをせず全本を書写したものであるとするならば、黒川文庫本の後半の註釈項目・註釈の文章と、内閣文庫本、神宮

文庫本のそれらとの異同数は、ほぼ前半と同じ比率であつて然るべきだろうと思われるが、第一表によると、書陵部本の残存部や本書黒川文庫本と他の諸本との間には殆ど異同はないのに、書陵部本の欠失部（黒川文庫本の後半部）に入ると、諸本との間に急激に異同が多くなることは、この書陵部本の欠失部に相当する黒川文庫本の註釈項目や註釈の文章が、ここまですとは異質の本文に変わったことを意味するのではないかとこの疑念をもたざるをえないからである。書陵部本と黒川文庫本との残存部が共通しているということは確実だが、そのことは、書陵部本の後半脱落部もまた黒川文庫本に残っている形と同じであつたことを証明しうるとは限らない。書陵部本に即してその脱落の状況を検討すると共に、黒川文庫本後半部の性質をさらに検討することが必要なのであろうが、今は以上一般的解説にとどめる。



口絵12 黒川文庫本「孟信抄」若菜上本文冒頭



口絵13 黒川文庫本「孟信抄」若菜上七十三丁表